

まんだら通信

第242号(通巻276号)

平成28年09月 西暦2016年 佛暦2582年 皇紀2676年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

たまたま何かの 巡り合わせで

私ののもとに、毎月、「まんだら通信」というB4サイズのミニコミの通信が送られてくる。折々のできごとが仏教の法話にからめて語られ、フォームと反省させられたり、ホッと温かい気持ちになったり、カラープリントされた写真も美しい。

この通信、きれいな海で名高い千葉県白浜町にある紫雲寺の住職、高橋龍渉さんが愛用のマックで作成している。発行部数は5、600部もあり、読者は地域の人や檀家などだそう。初めてお目にかかってから、もう7年以上に



なるのに、きちんと届けてくださる。ほんとうをいうと、町の行事を取材に行つたとき、一眼レフでカメラマンベストを着て熱心に撮影している男性がいて、てつきり同業者だと思ひ込んで挨拶したのが出会いだった。高橋さんにとつてお寺は、「規制の緩やかな公民館」であり、「町の歴史を保存しておく図書館」。お堂で地元の音楽サークルがコンサートをしたり、境内が子供たちのバーベキューの会場になったり。また、自らカメラを下げ、地域のさまざまな行事やイベントに積極的に顔を出し、町の歴史を記録している。

高橋さんの父親は満州の開拓団付きの医師だったが、引き揚げの途中、母親と妹とともに亡くなった。たまたま日本の親類の元にいた高橋さんだけが生き残った。あるとき、寺の世話人から、住職の弟子が戦死して跡継ぎがないから、住職にならないかと持ちかけられる。そうして、中学を卒業すると京都の本山で修行。修行中に先代が亡くなり、20歳で寺を継いだ。

住職としての生活も、まもなく半世紀になる。

「自分は寺に生まれたわけでもなく、何かの力に導かれ、たまたまなったのですよ。だから、寺はみんなのものだと思ってるんです。」

たんとんと語っていた高橋さんのことを、このごろよく思い出す。「ふと気づくと、こうしていた。たまたま、こうなった。」

「なにかの巡り合わせで、自分のところに機会が巡ってきた。」

「仕事」というのは、そんなものかもしれない。

仕える事、と書くもの。

自分のところに巡ってきた縁を、「有り難いこつちや 結構なこつちや」(まんだら通信、2002年10月号)と受け、精いっぱい使命感、真摯な義務感、謙虚な責任感

でもって成していく。ひたむきに打ち込んで、死ぬ時に、ああ天職だったのかなあ、と振り返ることができたら、それが幸せなのかもしれない。

自信と信念をもって、いつも自分の真ん中にたつぷりと愛をたたえていたい。こうだと思ふことを、コソコソと続けたい。いつだってどれだけの人を幸せにすることができるか考えていたい。

「まんだら通信」が届くと、そういう誠実な気持ちになる。

一度会っただけなのに、不思議に忘れられない人がいます。

この記事をお書きになった、朝日新聞の記者さんの友澤さんとは、二十年前たった一度お会いしたのですが、実に素直で育ちの良さが殊に印象的だった記憶が、あの日の雨上がりの空気の湿った肌触りなどとともに、折りに触れハッキリよみがえります。

その当時、うっかりしていれば見過ごしてしまふ、街中の心温まる出来事を取り上げた『街模様』というかこみ記事を取材に来て、庭のプレハブで半日一緒に過ごし、お昼代わりのそのめんを食べ、館山駅までお送りしました。

記事の中で「京都の本山で修行」は、実際は成田山の僧堂「勸学院」の間違いですし、発行部数は今では約千部になっています。

友澤さんにお会いしたのはたった一度ですが、年賀状の余白に細かい文字で、過ぎた一年の出来事を報せてくださったりするので、ブログやフェイスブックなど、今は何をしておられるかがよく分かります。

最近朝日新聞の大きな役職についておられるようで、私の見る目は間違いではなかったと、何だか鼻が高い気分です。

実を言うと、この記事は以前取り上げたことがあるのですが、『まんだら通信』の新しい読者も増えましたので、ご参考までに再掲載しました。

大東亜戦争の戦犯は アメリカです

今年、東京市ケ谷で『極東国際軍事法廷』、いわゆる『東京裁判』が行われてから七十年目だそうです。

あの裁判が終わってすぐ「やがて正義の女神が、この裁判を天秤にかけて、何れが正しいか判断を下すであろう。」といったのは自身も判決に加わったインドの国際法学者で、インド最高裁の判事ラダ・ビノード・パールさんでした。当時のアメリカ大統領ルーズベルトは、国内では日本人の財産を没収した挙句、強制収容所に隔離した上、石油や鉄の輸出を停止するなど、何とかして日本を戦争に引き込むため、手を変え品を替え策略を巡らせました。

その一部始終は、ハミルトン・フィッシュの『ルーズベルトの開戦責任』に詳しいのですが、日本は真珠湾攻撃で勝ち目のない太平洋戦争にのめり込むことになりました。

そうして昭和二十年八月、広島と長崎への原子爆弾で日本は降伏して戦争状態は終わります。東京裁判でA級BC級として処刑された人は、一千人以上になると思いますが、日本から見れば原爆投下や二十年三月十日の『東京下町大空襲』も立派な戦争犯罪です。

戦争の原因を作ったのは誰かを考えれば、アメリカこそ戦犯に相応しいと思うのです。

これは、田舎のジイさんが世迷い言を言っているのではなく、日本在住何十年のイギリス人ジャーナリスト、ヘンリー・S・ストークス『戦争犯罪国はアメリカだった』、クリストファー・ソーンの太平洋戦争の考察『太平洋問題三部作』がこの数年の間に矢継ぎ早に出版されています。歴史を正しく読めば以上の通りですが、問題は東京裁判史観にからめ捕られたままの、私たち日本人が、何が正しいかをもう一度勉強し直すことではないでしょうか。

私たちには、子孫のために日本人の誇りを伝えるという、大事な務めがあると思っております。

最近、外国人観光客も増えているんですが、また、外国人が経営しているレストランもよく見かけますね。

インド人やネパール人が経営しているカレーの店なんか皆さん、行かれたことがあると思います。が、おもしろいのは彼らの日本語ですね。たまたごしさにユーモアがありますよ。『辛さ、どの程度しますか。これ、激辛ね。インド人もびっくりよ』なんて、いつの流行語だっただけですね。

先日、イタリア人がオーナー・シェフのレストランに行ったら、店員さんがメニューをまちがえちゃったんですね。僕はマカロニの入った野菜サラダを前菜に頼んだのに、なぜか海鮮サラダが出てきたんです。

『あれ、頼んでないよ』と言ったら、あわててイタリア人の鼻の高いオーナー・シェフが出て来て、こう言ったんです。『マカロニ遺憾に存じます』って。やるじゃん。

今日は、ちよつと勇気のある食べ物の話。

女優の寺田有紀美さんのお母さんは、八十九歳になります。今年の三月まで、ある病院で寝たきりの生活でした。話もできず、寝返りも打てず、ただ眠っている。

食事も水も満足に摂れないような状況でした。まさに、枯れるのを待っているようでした。有紀美さんも、このままお母さんも大往生だなんて思っていて、覚悟を決めたある日のこと、担当医が病室に入ってきて、有紀美さんにこう言ったのです。

『このままでは死を待っているようなものです。胃ろうを造って延命治療、しませんか』

胃ろうとは、胃に管の入り口を作って、そこに管を入れて、口からではなく直接、そこから栄養を取り入れる装置です。そうすれば、きちんと一日、カロリーが確保されますから、命は保障されます。

ただ、胃ろうを造ってしまうと、たとえ脳死した状態になっても、心臓が動いている限り、栄養はお母さんにいきわたりますから、今度は外せなくなるのです。

『そんな状態では、生きていていえないわ。先生、母に胃ろうはしなくても結構です』と有紀美さんは、はっきりと言いました。『いいんですか。このままでは、あなたのお母さんは亡くなってしまふのですよ』。医者は、どうも胃ろうをやりたいらしいのです。困りますね、こういうお医者さんは。『はい、いいんです。人間、自分で食べられなくなったら、死ぬんですから』。有紀美さんが言えば、医者はこう言いました。

『でも、そのことをあなたひとり決めていいんですか。お兄さんやお姉さんと相談してみなくていいんですか。お母さんは死んでしまふのですよ』

いや、しつこい、しつこい。もともと、お兄さんやお姉さんから、お母さんの介護はすべてまかされているし、第一、延命治療などしたら、兄妹とはいえ、お金のことで揉めかねないですから、有紀美さんは断り続けたのです。すると、どうでしょう。病院側は、これ以上、何もやることはないので、もう治療もしないと言ったのです。

ここで有紀美さん、腹をくくりました。眠っているお母さんにこう囁きました。

（お母さん、私が死なせてあげますからね。さあ、私と一緒に家に帰りましょう。こんな病院に入れてごめんね）

有紀美さんは、早速、お母さんの退院の手続きをとると、念のため、知り合いの訪問医療専門のお医者さんに電話を入れ、万一の時は来てくれるようお願いしておきました。

そして、家に戻って、お母さんをベッドに寝かせると、有紀美さん、早速、お母さんの晩の食事を作り始めたのです。お母さんは、病院でもほとんど食べていないのに、なぜ、有紀美さんは食事を作ろうとしたのでしょうか。

それは、お母さんの最後の晩餐を自分の手で作りたかったからでした。その最後の晩餐とは、先に亡くなったお父さんの手料理を、お母さんのためにあえてペースト状にしたものでした。お父さんはもともとレストランのオーナー・シェフで、お父さんの洋食は、井上陽水さんも訪れたほどの腕前だったので。

（お母さん、私がお父さんの料理を作るから、食べるんだよ。どうせ死ぬんだったら、これを食べてから死んでね）

有紀美さんは、最高級の肉をステーキにして、その上にバターを乗せ、塩コショウをしてそれをハンドミキサーで徹底的に混ぜ合わせ、次にキノコなどの野菜のペースト、さらにはアボカドも細かく切ってミキサーに。さらに、麦茶でゼリーを作り、これを冷蔵庫で冷やして、水がわりに食べさせようと思いました。

お母さんが食べないのは、病院食ではのどにつまるからです。飲み込むことももうまくできないお母さんに、病院食という無神経さに腹を立てていた有紀美さんが以前から考えていた最後の晩餐のレシピがそれでした。

ベッドからそつとお母さんを抱き上げ、口の中を軽く湿しながら掃除をし、まず、麦茶ゼリーを小さく切って口の中に入れました。スルツとを通過していきます。またひと口、ゼリーが。そして、いよいよ最後の晩餐のメインディッシュです。最高級ステーキのバター味のペースト。

（お母さん、お父さんの味ですよ。これを食べて死んでね。口を開けてね）

お母さんは目をつむったまま、目を開けました。舌の上に、お父さんの思い出の味が……。お母さんののどがゴクリと動きました。

（お母さん、おいしい？ もうひとつ食べると、また、おかあさんの口が大きく開きました。食べたよ。何が胃ろうよ！ 病院は何をしてたのよ。何が胃ろうよ！ 有紀美さんの頬をいつの間にか、涙が伝わっています。）

（お母さんは、生きようとしているんだ！）。有紀美さんは、今度は麦茶ゼリーを、次にアボカドをあげました。

あれから五カ月、寺田有紀美さんのお母さんは、いまや、ベッドに座ってごはんを食べるまでに回復しました。最後の晩餐は、まだ続いています。

空間の演出が出来ます。プランターで育てた花や採れたての野菜をお供えしたり、お香も今風の匂いの良いもの、灯明も蜜蝋キャンドルなら、ほのかな香りが部屋に漂って、今風に言えば癒し効果抜群です。戴き物などお供えしたお下がりを食べる習慣をつければ幼児教育にはうってつけです。▼今月の野草はハマカンゾウ【ススキノキ科ワスレグサ属】。5~6月ころ咲くヤブカンゾウに似ていますが、秋風が吹き始める今ごろ、海岸や海辺の岩場などに咲き始めます。この花が咲き始めると、うだるような暑さから解放されると思えて、幸せになります。 2016.09.09 龍渉



▼一時はどうなるかと思った今年の暑さ。ようやく秋風が吹き始めて、去る5日、目度く82歳になりました。これでリハビリテーションのメニューをこなせるようになれば、多少は元気になると楽しみです。▼「アメリカこそ戦犯」などと悪態をつきましたが、アメリカ人そのものを悪く言うつもりはありません。世界的に有名な日本語学者ドナルド・キーンさんなど、東北大震災で日本人が少しでも元気になるればと、日本に帰化しましたし、アメリカの駐日大使だったライシャワーさんは、「私の墓は日本に一番近い太平洋岸に作って手欲しい」という遺言だったとか。▼1ページの写真は少し古いのですが、『あそか基金』